

「ハッ場ダム建設事業の検証に係る検討報告書（素案）」に対する関係住民の意見聴取

平成 23 年 11 月 6 日（日）10:00～12:00

さいたま新都心合同庁舎検査棟

発言者：意見発表者 6

東京都多摩市から参りました●●●●と申します。よろしく申し上げます。じゃあ、座って話をします。やや、私の前歴をお話させて頂きますと、13 年前に、元という名前を使わなくてははいけません、東京都立大学の土木工学科におりました。今はほとんど、スクラップ同然なんですけども、こういうとこに出てくる、出てきたい、というか出てこざるを得ないという事態に非常に私は、なんというか悲しいというか、怒っているというか、そういう感情を頂いております。私は土木工学科におりましたので、今日の概要には書いていないんですが、一番頭にきていることは利水ですね。毎年毎年、予測が全く外れる。外れ外れ外れてきたのに、まだその予測を使うというのか、非常に、エンジニアではないですよ。3.11 からの教訓として災害が起きないように、今、ハッ場ダムを造れ、造れと言っているけど、それは全く逆立ちみたいな議論で、そういう、どうしてそういう予測が外れて、利水予測が外れてきたかっていうことをなぜ、恥ずかしいと思わないのか、ということが、第一番の、私は、昔は土木で上下水をやったんで、そういうことから言えて、利水については、これは、台風の来かたというのはかなり当たるも八卦当たらずも八卦で利水ほどではないんですが、治水のことについてはちょっと置くとしても、ほとんど、カスリーン台風の時も効いていませんし、今後効く、という可能性は非常に低い。まあ、ゼロとは申しませんが、この点は少し利水とは違うと思いますが、そういう印象を持っております。ただ、これは、詳しい方が大勢いて、多分、いろんな方が意見聴取を応じられると思うので、私はむしろ、今日は私の一番専門に近い土質力学とあって、地面より下の話ですね、地面より下の構造物のことを力学的にやるという事で、ずっと、定年まで給料をもらってきたので、非常に今日いらっしゃっている方の顔ぶれからすると、なんか非常に重箱の角をつついたようなことになるかもしれませんけど、こちらの方は非常に、そういう意見もあるか、と聞いて頂けると、主催者の方には聞いて頂いて、聞いて頂けるかと思ってやや細かな、細かなということは重要ではない、ということではありません。代替地の安全性、というか代替地の安全をほとんど検証していないのではないかと、という懸念を持っているので、その、斜面安定の問題に限ってですね、今日、意見を述べたいと思っております。ですから、どちらかという、正面の方よりも、右の方に座っている方々にぜひ言いたいという内容になります。本当は何かパネルみたいなのか、パワーポイントを持ってくれば良かったんですけど、ちょっと、申し訳ありません、分かり難いと思いますが、手ぶらで話させて頂きます。たまたま、先ほど、2 枚の紙を裏表で A4 が配られたんで、これでも眺めながら聞いて頂けると良いと思いますが、これは代替地の断面図を書いた図で、代替地が崩壊するかどうか、という議論なんです。で、代替地については、まず、第一の特徴が 30m とかいう、これを見ているとね、3cm しかないからどうってことなく見えるけれども、実際、現場では 30m っていう高盛土っていうのは、非常に日本でも施工例の少ない例で、私などは、基準類なんかも扱っていた関係で、そういう 30m、50m っていうところまで現在の基準が想定していたかどうか書いてありません。書いていないから、使うということだと思うんですけども、現在の基準をですね。普通、住宅でいきますと 10m とか、そういうところを官としては一応前提として、どなたでも使い易いような基準が作られている、と思うんですが、それに乗っ取って、30m のような斜

面の安定を計算したということ。そういう問題、私は非常に懸念を持っているということ。結論を先に申し上げます。で、どういう順序でお話するかといいますと、まず私が頂きたいというか、メールでみた、報告書の素案、それに対する今日は意見を述べよ、という事なので、報告書の素案にいきますと、第4章が本体部分で、第4章が、事業、総事業費及び工期というところで、かなり大部分を占めていると思うんですが、その(1)が総事業費で、1)が点検の概要ってなっていて、その2)が地滑り対策で、これは湛水した時の地滑りの問題で、(3)が代替地の安全性について、というところにカウントされてます。ほんの簡単にしか出ておりません。で、今度のことは代替地で金を食うかどうか、というよりも本体に危険があるので、そういうことになっていると思うんですけど、その中で、文章としては、こんな風になっていますね。「代替地の安全性については、全ての代替地地区の盛土に対して安定計算を実施して対策工の必要性の検討を行った。」と書いてありますが、私が言いたいのは、安定計算というのはかなりの外れなような事をしているのではないかと、ということが今日の主旨です。報告書に対しては、その箇所について意見をします。代替地の安全性についてはどういう事が今まで言われてきたかというのと、私の知る限り、ハッ場ダム工事事務所から、県の建築住宅課長宛に出した報告書、これ平成22年8月30日の報告書、これですけど、それが私の手元にございます。で、今日の本題は何か、というのと、その代替地の斜面の中に地下水があるとして計算を、力学の計算をしているのか、地下水が無いとして力学の計算をしているのかという一点に尽きます。そういう細かな話をするのですが、今申しました、ハッ場ダム工事事務所の平成22年8月30日の文書によりますと、私が関心を持っているのは、その中では川原湯の②と③とかいう、書かれている斜面なんですけど、ここでは、川原湯の②としておきましょうか。この地図、すごく遠いけども皆さんも飽きるほどご覧になっていて、これが川ですね、ダム地点がここで、駅がここにあって、川原湯の代替地がこの辺にあります。この地図は皆さん、頭に刷り込んでいらっしゃると思うんですけど、この辺の斜面についての問題です。これを読みますと、地下水が可能性無しって書いてあるんですね。川原湯は、川原湯の断面①、断面②、断面③、あ、断面①は可能性有りだけど断面②と断面③は可能性無し、要するに地下水が無いとして計算を行ったというふうに読める訳です。その、去年の夏の報告書、それで、これは県が代替地の安定性に不安があるのではないかと、問題があるのではないかと、という疑問に対して、じゃあ、ありませんという返事として、可能性無しという前提で計算して安全だったという報告書を書いているんですね。で、次の問題は、じゃあ、ないのか、というとかかなり古い話になりますけども、事の始めといいますか、平成15年3月というのと、今から何年前になるんでしょうか？約10年、8年前ですか。セントラルコンサルタント株式会社というのが、これは代替地の、一番始めにこの代替地の斜面安定計算してまして、川原湯打越地区、私が着目したのは打越地区という名前、今、川原湯②か③という名前と呼んでいると思うんですが、代替地造成設計業務報告書を見たのは私がこの問題に係わった初めてでして、その辺の設計条件、設計条件というのは、施主、施主というのは土木屋の言い方ですけども発注主、この場合は国です。国交省と考えて良いと思いますが、普通、設計条件というのは施主から示されて、それを建設業者が施工するんですけども、その時だいたい、計算書なんかはコンサルタントに委託してやらせる。その場合は国交省が、こういうふうになれば安全ですというか、こうしなければいけないという設計基準として示すわけですね。それには明らかに完成直後の斜面、この斜面ですけど、代替地の斜面の中には間隙水圧が存在する。間隙水圧、水一杯一杯考えなくても良い。半分、盛土高さの半分だけで、0.5を掛けた地下水が中にあるとして計算しなさい、という設計基準を定義してて、セントラルコンサルタントの計算書を手にしたんです。それはですね、皆さんにお配りしたその1ページにでっかく書いてある。これなんですけど、これは36ページを引き抜いた、そういう条件である、という前提でずっと進んでいて、そういう計算して

きて、だからダメというんじゃないですけど、非常に違和感のある、違和感というのは、自分で計算して、計算機回してこうした図面を書かせた人間にとっては非常に違和感のあるんですね。ここの正方形が黒く、もともと護岸が、これはどこに中心が円弧滑り、円弧で斜面が崩壊する、円弧に沿って崩壊するといった時に、中心がどこに来るかという。もう一枚裏側の私がやった計算ではかなりイメージ違うでしょ。だから、円がどこにあったら、いくら安全率になる、という事が分かるようになっている。一番小さな安全率、最小安全率を求める計算を試算的にやるわけですが、こういう風な計算がセントラルコンサルタントの計算書の中の 36 ページに出ている。次は、じゃあ、国交省は去年の夏にですね、宮崎岳志さんという衆議院議員への回答として、地下水位の問題について回答しています。それは、去年の 2010 年度の 7 月 7 日と 9 月 7 日に水抜き管を、代替地の水抜き管を調べたら水が出てなかったから、水が出てなかったから、地下水が無いと考えて計算して良いんだ、という主旨の回答をしている訳です。これは質問主意書じゃないかと思えますけど、議員への回答というのは、委員会答弁かもしれませんけど。それは、4、5 日、ここに表が、降雨の表があるんですが、4、5 日間、雨が無い後に見に行くと、私に言わせればやっぱり無かった、という話なんですね。こういう谷地形を埋め立てて、段々と言いますか、代替地造るわけで、谷地形に降った雨が、蒸発しちゃうとか、地球の芯にですね、地球の芯に行っちゃうってことは無いわけで、必ず、下は大まかには岩盤の上に盛土斜面で、岩盤と盛土の間を地下水は降りてきて、斜面にしみ出す訳です。私が想定したのは、裏側の下の方、地下水条件、地下水有り、波線で書いたのはこれは私がインチキで波線を入れたんじゃないんです。計算機がブルーで水位なもんですから、青色で書いているので、プリントすると青色が出ないという、極めて技術的な問題で、私が波線でなぞってあります。こういう風に、上から降った雨はですね、こういう、私が入れた波線に沿っていった形で出てくるわけです。そうすると、一番、これ法尻って言うんですけど、この法尻の崩壊が、一番危険になるわけです。そういう意味で、全く常識的に。後 1 点だけ、常識的に、谷地形で降った水がどこにいつちゃうんだ、という話になるわけで、ちなみに晴天が続いて試しに見に行ったら、水が出てきませんでしたら、これはさっきの詐欺とか偽善とかいう言葉がありましたけど、かなりそういう子供だましの言い方。最後に、ここに、じゃあ、私がだから、たまたまこれはちょっと様式違いますけど、上の方が地下水無しで計算、下が地下水有りで計算した、ほとんど同じ条件ですが、上の方が 1.97 っていう安全率が書いてありますね、これね、下に。最小安全率っていう。下は 1.45 っていう安全率。だから、私は条件によってこの値、数値自体が変わりますが、約 3/4、安全率が 3/4 に低下しているっていうことが分かる訳です。で、そういう事から考えると非常に何というか、ありもしないというか、起こりもしない状態での計算で安定だと言っているんじゃないか。断定はしませんが、そういう疑いが極めて濃厚だと言うこと、で私の意見を終わります。

以 上